

エコノミー、エコロジ、そしてエシックス

正慶 孝*

「満ち足りた胃袋、空っぽの魂」

「満ち足りた胃袋、空っぽの魂」と繁栄するアメリカ合衆国の現状を評したのは、ロバート・N・ベラーである。一九六〇年代にすでに世界で最初に高度大衆消費社会に到達したアメリカ合衆国の経済的繁栄がかえって精神的貧困をもたらしているという状況を的確に示しているこの評言は、アメリカ合衆国にだけあてはまる現象ではなく、その後高度大衆消費社会の段階に達した国々に広範に共通してみられる現象である。もちろん、バブルにうかれバブルの報復を受けている「カジノ資本主義」国日本も、この例外ではありえない。

一九六〇年代後半に世界の先進工業国の多くの都市でみられた「学園紛争」(キャンパス・ウォー)は、このベラーと同じく、経済的繁栄がかえって精神的貧困を生んでいると指摘するスチュUDENT・パワーの

爆発であった。世界でもっとも豊かで社会福祉も充実しているスウェーデンのストックホルムで、ヨーロッパで最初の「異議申し立て」の暴動(一九五六)が起きたのも偶然ではなかった。人は「満ち足りた胃袋」だけで生きていくことができない。このことをもっとも敏感に感じているのは、生まれながらにして「豊かな社会」のなかに投げ出された最初の世代である青少年であった。

一九六八年五月にパリで起きた「五月革命」に参加した学生たちも、同様であった。かれらコンテスタトル(異議申し立て分子)の掲げたスローガンをみると、「消費社会」に対する徹底的な「異議申し立て」(コンテスタシオン)がみられる。たとえば、「消費社会はくたばらなければならぬ。淫売婦よ! おまえの皮をはいでやる!」とか「商品は燃やしてしまえ」などの文句が大学の校舎の壁に大書された。あふれるばかりの商品が娼婦にたとえられているのである。

一九六〇年代後半の世界各地でみられた「ユース・クォーク」(若者の反乱)は、それぞれの国によってニュアンスを多少異にするとしても、大略消費文明と消費文明を支えている「既成体制」(エスタブリッシュメント)に対するラディカルな「異議申し立て」であることでは一致していた。日本の学生たちの反「既成体制」運動もまた、大きくはこのような世界的な波動の一環として位置づけることが可能である。

消費文明の進行は、こうした激しい「異議申し立て」があったにもかかわらず、停止することはなかった。それどころか、かえっていちだんと進展している。しかも消費文明は発展途上国にもおよび、世界全体が消費文明の大きな波動に洗われているのである。したがって、今日の倫理観や経済倫理を検討する場合、消費文明の状況を無視して語ることができない。また、環境問題や社会的エントロピーを増大しているような

地球的巨視的課題（グローバル・マクロ・プロブレム）を論じる場合、消費文明やその背後にある経済文明全般についての根本的な検討が必要である。

「経済人」そして「ホモ・ファアベル」

現代は「大転換」（グレート・トランスフォーメーション）の時代である。このことを疑う人はいない。経済的側面あるいは技術的側面においては特にそうである。ダニエル・ベルの「ポスト・インダストリアル・ソサエティ」（工業後社会）、Z・ブレゼンスキイの「テクネトロニック・エラ」（電子技術時代）あるいはアルビン・トフラーの「第三の波」など、現代がこれまでの産業社会とは異なった段階に達した「新しい社会」に移行していることを示す概念に事欠かないのは、現代が大きな転換期にあることの有力な証明であるといっても、過言ではないであろう。

これまでの産業社会は、「産業革命」によって成立した「工業社会」であった。ふつう「産業革命」は英国での産業上の革命のことである。産業革命は、一七六〇年から一八三〇年にかけてのジョージ三世からその子のウィリアム四世にいたる治世の時代の出来事で、英国はこの時代に政治的にも経済的にも大きく変貌を遂げた。この「産業革命」が世界各地に伝播して、「工業社会」が誕生したのである。この産業社会は、生産要素のうちもっとも稀少な資源である資本が支配的であったところから「資本家的生産様式」（カール・マルクス）とよばれている経済システムによって推進されている。

ふつうは「資本主義」とよばれるこの経済システムは、経済的以外の社会全般の状況も含めた概念として「経済時代」（das ökonomische

Zeitalter）ともよばれている。この「経済時代」という用語を新鑄したのは、ヴェルナー・ゾンバルトであった。かれによると、「経済時代」とは「経済が、経済的利益が、したがってまたこれに関連していわゆる『物質的』重要性が、他のあらゆる価値に対して優位を要求し、また獲得して、そのため経済のもつ特性が、他のすべての社会、文化の領域を特質づけている」時代のことである。ただしゾンバルトは、この「経済時代」は、過去一世紀半においてそしてただこの時期のみの特質であると述べている。このように、ゾンバルトのいう「経済時代」は、産業革命以降現在にいたるまでの支配的な「工業社会」の意味で用いている。

しかし、筆者は「経済時代」の始まりは、世界最初のベンチャー・ビジネスマンであるクリストファー・コロンブスなどが活躍し、歴史に一面期を描いた大航海時代からはじまるものと考えている。コロンブスに多大の影響をあたえた、世界地図の最初の作成者であるトスカネリがいったように、やがて「貨幣追求」によって活動力があたえられる社会がやってくるといふ彼の予言は、コロンブスのアメリカ渡航以後すぐに到来した。この「貨幣追求」によって活動力があたえられる社会というのは、その核心的な内容において「経済時代」とよんでも少しも差しつかえないからである。

プレ・コロンブスの時代においては、西ヨーロッパにおける経済活動は神の信仰によって制約や束縛を受け、「儲けるだけ儲けよう」というような利潤追求的な経済活動は異教的なものとして斥けられていた。キリスト教（カトリック教会）は、建前の上では利子を容認することはなく、資本の蓄積というような観念も比較的乏しかったから、全財産を寄進してゴシック式の大伽藍を建てることに大いに意義を見いだすことはあっても、大工場を建設して旺盛な生産活動を行ない、資本を蓄積する

というような拡大再生産的な膨張的欲望は支配的ではなかった。キリスト教において公然と利子をとることの正当性を容認するようになったのは、宗教改革後のカルヴァン主義の擡頭以後のことで、それまでのキリスト教経済思想は、「商人の神に嘉しとされることは難し」(Homo Mercator vix aut numquam Deo Placere potest.) という標語に要約されるように、商業利潤に対する憎悪と反感がみられるところにその特徴を見いだすことができる。

この思想がまったく逆転するようになったのは、探検・通商・戦争などによって異教的世界が現前したことと、宗教改革によって新しい「経済観念」が発達することによってであった。これは経済活動の面にみられるコペルニクスの転回であり、以後利潤追求は罪悪ではなくなっていく。それまでの時代は中世のカトリック神学の代表的人物であるトーマス・アクイナスの発言のように、「公正価格」(Just price) 以上に物を売ることに、あるいは営利の追求は神をおそれぬまったく罪深いものである。そのような経済観念からは経済発展の動機は生まれえない。革新や変化よりも昨日と同じように今日も生きていくことが何よりも大切な生き方では、現状維持が生涯の目標になるからである。

このような時代から変化や革新が支配的な時代精神に変わっていくのは、ルネサンスや大航海時代以後である。ルネサンスの代表としてニコロ・マキアヴェリ(一四六九—一五二七)を、大航海時代の代表としてクリストファー・コロンブス(一四五—一五〇六)を取り上げてみるならば、この時代に人間の生き方すなわちライフ・スタイルが大きく変わっていったことが発見される。中世人は運命に従容として従い、変化ではなく安穏な生活を望み、慎ましく生きることとその生き甲斐を見いだすという伝統的な生き方をしていた。中世人の支配的な生き方は信

仰にあり、すべての活動が神への信仰に収斂されていた。中世人は「ホモ・レリジオスス」(宗教的人間)であり、けっして「ホモ・エコノミクス」(経済的人間)ではなかった。

ところが、コロンブスの時代に「ホモ・レリジオスス」が「ホモ・エコノミクス」へと転換していく。コロンブス自体、次のようなことを述べている。「黄金とは実に結構なものだ。……これさえあれば、魂を天国にさえ送り出すことができる。」⁽³⁾このような極めて現実的であり神もおそれぬ大胆な発言が出てきたのも、コロンブスの時代が新しい「大転換」の時代にあったことを示している。世界最初のベンチャー・ビジネスマンであるコロンブスは、変化と革新の権化のような人物であった。かれは「これより先にいくな(non plus ultra)」と当時の船員に信じられていたヘラクレスの柱(ジブラルタル海峡)を越えて、今日アメリカ大陸とよばれる当時のヨーロッパから見た「新世界」へ到達したからである。コロンブスが影響をうけたベニス商人マルコ・ポーロの「最初の世界記述」である『東方見聞録』を読んだコロンブスが「エル・ドラド」(黄金郷)と信じていたのは、チパング(日本)であったから、この大冒険を誘発したのは、あるいは日本であるかも知れない。ともかく、彼は「もっと遠くへ」(Plus ultra)とってしまった最初の近代人になったのである。

かれは自分の運命は自分で切り開かなければならない、という信念をもった「近代人」であった。シェークスピアの傑作『ジュリアス・シーザー』の台詞のように、「上げ潮にのれば、一財産ができる」ことをよく知っていた「キャリア・ストラテジスト」(自らの経歴を自らの力量でつくり上げる人)であったからこそ、前述のような台詞が吐けるのである。もちろん、黄金の魅力はだれよりもよく知っていた。

同じくシェークスピアの『アテネのタイモン』のなかの台詞を引くと、キラキラ光る黄色い黄金は「黒も白に、醜も美に、邪も正に、賤も貴に、老も若に、怯も勇に変えることができる。」もので、それを手にした者に万能の力を付与するものである。コロンブスの大きな企ては、中世人から近代人へのライフスタイルの転換を明確にした大転換であった。

この転換は、「神」の信仰から「マモンの神」(富の神)への信仰への宗旨替えであった。

この時代以降、世界は「もっと遠くへ」を追求する時代にはいっていかく。「限度」(limit)の時代は終焉し、「超越」(beyond)の時代が到来したのである。この「超越」の精神は、「ファウスト的衝動」(der Faustische Drang)とよばれる。これは「もっと、もっと」と無限を求め「無限の衝動」(progress ad infinitum)のことである。

マキアヴェリの「政治的人間」

コロンブス「経済的人間」とならんで興味深いのは、ニコロ・マキアヴェリの「政治的人間」(ホモ・ポリティクス)である。かれは『君主論』のなかで次のようなことをいっている。

「……、人間は古い昔のことより現実に関心があって、現在に彼らの幸福を見つけたとしたら、その方を歓迎して他を顧みるものではない。」⁽⁴⁾

「……自力に頼らない救済は何の役にも立たぬからである。自分を頼み、自らの力を頼む者が、よく確実で、永続がするからである。」⁽⁵⁾

このマキアヴェリの人間観は、来世ではなく現世に関心をもち、自らの力を頼みとする近代人の本質的なライフスタイルを示している。この

マキアヴェリの「ホモ・ポリティクス」は、先にコロンブスのところであげた「経済的人間」(ホモ・エコノミクス)と、まったく異なる人間像であることが気づかれよう。近代の「政治的人間」は、同時に「経済的人間」でもあるので、両者は同じライフスタイルの持ち主であるといっているのである。しかも、マキアヴェリは、「人間は恩知らずで、多弁で、虚偽で、臆病で、吝嗇であると一般にいうことができる。」⁽⁶⁾ともいっている。人間は利己心(セルフ・インタレスト)あるいは「自尊心」(セルフ・ラブ)の持ち主であることを、のちの時代の道徳哲学者アダム・スミスもいうことになる。その原型はすでにマキアヴェリによって述べられているのである。

再びシェークスピアの作品を借りれば、『ベニスの商人』のアントニオは、友人のために自分を顧みずに友人を救おうとする暖かい心情の持ち主でギャラントな精神に満ちた中世人であるのに対し、高利貸しのシャイロックは利害打算を冷徹に計算することのできる近代人である。このふたりの対立は、利子の容認をめぐるキリスト教徒とユダヤ教徒との対立である以上に「ドン・キホーテ」(騎士)と「パンチョ・パンサ」(計算家)との対立であり、「経済時代」はシャイロックのライフスタイルが支配的となって始まるのである。

いままで述べてきたように、マキアヴェリの「政治的人間」は同時に「経済的人間」であった。これは「経済時代」にとって核心的な装置である株式会社の原形的形態も銀行も簿記もイタリアで起こったことを思い出しさえすれば、よく理解できることである。カンパニーという会社を意味する英語もイタリア語に起源をもつし、ポンプとかピストンとかの機械用語ももとはイタリア語であったことは、ルネサンス期のイタリアに「経済時代」の端緒があることを示唆している。これらの機器は、

鉱山に関係した機器であり、実験室のなかで「錬金術」によって黄金を作り出すことではなく、鉱山で高価な天然資源を発掘することによって、富を増殖しようとする新しい「錬金術」の時代がはじまったことの現われであった。「万能の天才」であるレオナルド・ダ・ヴィンチ（一四五二—一五一九）は、芸術家である以上にエンジニアとしての能力を誇示し、飛行機、風力計、潜水器、戦車などの設計および製作を行ない、パトロンたちにそれらのプレゼンテーションを試みているのも、彼の時代から「経済時代」が始まりつつあったことを示す歴史的事実である。

このようなダ・ヴィンチの試みとともに注記しておかなければならないのは、「複式簿記」の紹介と普及である。ダ・ヴィンチの構想した機器（ハードウェア）が、ダ・ヴィンチの数学の師であり友人でもあったベニスで活躍したフランチェスコ会の修道僧ルカ・パチョーリの紹介した複式簿記（ソフトウェア）と結びついて、はじめて「経済時代」を將來することができたという事実である。パチョーリは、一四九四年に『算術・幾何・比・および比率に関する体系』を著わした。その一部に複式簿記の方法を紹介・解説した。この帳簿記入の方式は、彼の著書の出た一四九四年よりも二百年も前にベニスの商人たちには知られていた方式であり、このソフトウェアの発明から考えてみても、当時のイタリヤがソフトとハードの両面においていかにすぐれたハイテクな技術をもっていたかが知れる。これはまた、このルネサンス期に新しいタイプの人間「ニューマン」が誕生したことも意味している。これらの「ニューマン」（新しい企業家）がのちの時代に「産業革命」をリードしたアルチザン（職人）の祖型であった。蒸気機関を発明した時計師ジェームズ・ワット、経糸機械を発明した理髪師アークライト、汽船を発明した宝石師フルトンなどのアルチザンが新しい産業社会をリードする「ニュー

マン」になっていく。これらの新しい企業家たちは、ダ・ヴィンチの末裔たちなのである。

ロビンソン・クルーソーとベンジャミン・フランクリン

「ザ・ファースト・ミスター・アメリカン」という異名をもつベンジャミン・フランクリンは、人間は「道具をつくる動物」(a tool-making animal)であるといっている。「道具をつくる動物」とは、万物の霊長である「ホモ・サピエンス」の本質を「ホモ・ファーベル」(工人)にあることを強調した言い方である。この「ホモ・ファーベル」(homo faber)という概念は、マックス・シェーラーやアンリ・ベルクソンによって唱えられた。

前述のワット、アークライト、フルトンなどは、人間は「ホモ・ファーベル」であることの有力な証明である。アンリ・ベルクソンは、人間を「ホモ・ロクアクス」(homo loquax)すなわち「言語人」と、「ホモ・ファーベル」すなわち「工人」とに分けて、人間社会は「ホモ・ファーベル」によって推進されると述べている。

この「ホモ・ファーベル」としての人間を代表するのが、実在の人物としてのベンジャミン・フランクリンと虚構の人物であるロビンソン・クルーソーである。

ダニエル・デフォーの小説『ロビンソン・クルーソーの生涯と奇妙で驚くべき冒険』は、一七一九年に上梓された。アダム・スミスの生まれる四年前のことである。そのころのイギリスは、重商主義の時代で、まだ産業資本主義は成立していなかった。富を獲得するのは貿易や植民生活動で、工場をつくって工業製品を製造し、それを売って利潤を得ようと

する産業資本の確立にはもう少し時間が必要であった。その時代の転換期にクルソーが登場するのである。この人物はそののちの時代の英国産業界のリーダーになるもともと典型的な人間類型である。かれは父親の忠告を聞き入れずに、船乗りになってしまふ。父親の忠告は「中間の身分」(the middle station)に甘んじるようにといいものであった。その身分は、幸福の真の基準であって、その身分になることを決意するのなら、親としてあらゆる援助を惜しまないというのである。

しかし、そのありがたい忠告を振り切って「世間に出て成功するといふ漠然とした、何の根拠もない考え」⁽⁸⁾に取りつかれたクルソーは、船乗りになってしまう。

ここには、親子の対立を通して安泰と現状維持を欲する「前経済時代」の人々と、現状を打破しようとする進歩と変革を願う「経済時代」の人々との対立が描かれている。もちろん、産業革命以後、英国を世界の覇権国に押し上げていく跳躍台は後者によって構築されたのである。クルソーの父親はわが子のために安泰な生涯を用意させようとしている。父親のすすめる生涯設計(キャリア・ビルド)に沿う人生をクルソーが選択したならば、かれは封建時代同様のパターナリズム(父権主義)を受け入れることになり、そこには独立自尊の近代人の精神は微塵も発見されない。

クルソーは、父親の忠告は無視し、新しい時代の新しい生き方を選んだ。この新しい生き方とは、自力更生であり、成功したらその果実は収受するが、失敗したらその損失を償うという「メリットクラシー」(業績主義)の上に立つライフスタイルである。

クルソーの生き方は、それゆえ、「適者生存」、「優勝劣敗」の資本主義的生き方を示唆している。前述の『ベニスの商人』が高利貸し資本

から商業資本への転換期の経済状況を描いているのに対し、この作品は重商主義(商人資本)から産業資本主義への移行期の状況をロビンソン・クルソーという人物を通して描いているのである。

乗船した船が難破して見も知らぬ土地の海岸に打ち上げられて自分ひとりだけが助かったことに気づいたときからの活動というものは、まさに資本家的企業家のビヘイビアで、資本主義の本質を考える上で重要な示唆をあたえてくれる。

彼はまず、難破船に戻って必要なものを引き上げることから仕事に着手する。たとえば、大工の道具箱を見つけるとこれを持ちかえる。「これはそのときは、船一杯の金塊よりももっと」⁽⁹⁾貴重だからである。また、武器と弾薬を持ちかえる。

このように、食糧から武器弾薬まで船の用材を利用してつくった筏にのせて陸地に持ちかえると、次にやることはそれらを貯蔵する場所を確保することである。こうして、次々と仕事をこなしていく。

「私は役に立つようなものを凡て船から出すのについて、出来るだけのことをしたのであり、もっと時間があつたにしても、もう船には持ち出せるものが余り残っていなかった」⁽¹⁰⁾ので、次の仕事にとりかかったのである。それは健康、安全、そして通りかかった船に発見されやすくするために住む場所を選ぶことであった。その場所が決まるとテントを張って、そこに住むことにした。ここでクルソーは、奇妙な振る舞いをする。「テントを張るのに先立って、私はうつろになつて居る場所の前に、そこを中心に十ヤード程の半径がある半円を描いた。……この半円に沿って、私は二列に頑丈な樺杭を地面に打ち込んだ」⁽¹¹⁾のである。これは安全のためであるが、それとは別の重大な意味のあることをいままでの経緯から理解できよう。それは「囲い込み運動」(Enclosure Move-

ment) のことである。この「困い込み」こそ、英国において大きくは二度にわたって行なわれた資本の「原始的蓄積期」の出来事に他ならず、ロビンソン・クルーソーの物語は、現実の英国経済史を背景にしていることを示唆しているのである。「困い込み」運動が、トーマス・モアの作品『ユートピア』で知れるように「羊が、人間さえも喰い殺してしまふ」という暴力的な出来事で、このため農民は「共同耕地」から追放され、英国史でいう「農民流離」(Rural Exodus) がはじまる契機となったことはよく知られている。

さらに、クルーソーは、複式簿記の借方貸方と同じ形式で日記をつける。これは「私の境遇でいいことと悪いことを比較し、境遇としてはまだ増しな方であることを」⁽¹²⁾ 明らかにするためであった。

このような発想を従来の漂流者は試みたであろうか。複式簿記の方法で日記をつけているのである。ここに見られるのは、強烈なプラグマティズムの精神である。しかも、このプラグマティズムは、宗教心の覚醒とも結びついている。彼は「聖書を読んだり、神に祈ったりすることで、より高いことに考えが向く」⁽¹³⁾ ようになる。そして、日課の第一は神に祈ることである。これは聖書を読むことで一日に三度必ず実行する。

プラグマティズムと信仰、ここまでくれば理解できるように、これはプロテスタントイザムの倫理に基づいて現実生活を送る人々と同じライフスタイルである。英国のプロテスタントは、ピューリタン(清教徒)とよばれることは、よく知られていることであろう。

そのスローガンは、「天はみずから助くる者を助く」である。クルーソーの実践はまさしくこのスローガンの通りであった。

このクルーソーの物語は、その後英国の若者のバイブルとなり、英国がいち早く産業革命に成功し、その力を駆って「世界の工場」となり、

また、七つの海を支配し、「太陽の沈まぬ国」とよばれるような国になる、精神的なバックボーンとなった。

クルーソーはまた、「工人人」でもあり、投資家でもあった。「私は相当量の穀物を確保し、絶えず新たに収穫出来るようにもしたかったので、こんど収穫した穀物には手を付けず、全部次の季節に取って置くことにした」⁽¹⁴⁾ これは収穫(一般的な言い方をすれば所得)を消費と貯蓄に分けるとすると、消費に向ける部分を少なくして、貯蓄の部分を多くすることを意味する。ここでは貯蓄をする主体と投資をする主体は同じ人物であるから、将来の収穫を大きくするため、現在の消費を幾分か断念するということは、すなわち投資をすることに他ならない。ここにみられるのは、収穫を時間の経過にしたがって増大させていくという「拡大再生産」(経済成長)の考え方であり、ここに投資家クルーソーの面目が躍如とするのである。

もはやここには、冒険商人(マーチャント・アドベンチュラーズ)の姿は発見できない。利害打算に基づいて慎重に行動する産業資本家がいよいよ登場する時代がやってきたのである。当初は父親の忠告に背いて船員になって船に乗り組み、その結果、難破して無人島に流れついたことを嘆き悲しみ絶望の淵に立たされたクルーソーは、自己変革をなし遂げ、ついには自らの努力で道を切り開いていく。そのドラマは、一国の経済発展のドラマとしても観察できる。W・W・ロストウのいう「離陸」(take-off)は、それまでの停滞的な状態から自律的な経済成長の軌道にのっていくことをさす概念であるが、それはあたかもクルーソーの自己変革の様子と類似しているからである。

産業革命は、変革と進歩を標榜し、自己の責任において何事かをなしとげようとする人々によって遂行された。このようなタイプの人間を典

型的に示しているのが、実にロビンソン・クルーソーなのである。

先に述べた「ザ・ファースト・ミスター・アメリカン」であるベンジヤミン・フランクリンもまた、変革と進歩を標榜し、それを実践した新しいタイプのアメリカ人であった。カール・マルクスによって、「新大陸における偉大な経済学者」と評価されたフランクリンには、有名な『自伝』がある。この自伝は、アメリカにおいてもっともはやく資本主義を発達させたニュー・イングランドの精神的風土のなかで人となったフランクリンの社会観(ヴィジョン)がよく現われている。そのなかに十三の守るべき徳と戒律をあげている。それは(1)節制、(2)沈黙、(3)規律、(4)決断、(5)節約、(6)勤勉、(7)誠実、(8)正義、(9)中庸、(10)清潔、(11)平静、(12)純潔、(13)謙讓、である。マックス・ヴェーバーは、これらの徳目にみられる経済倫理をプロテスタンティズムの倫理とよび、フランクリンを「資本主義の体現者」と評した。これはフランクリンがアメリカの工業主義(インダストリアルイズム)の象徴的存在であったからに他ならない。まさにフランクリンは、アメリカにおいても資本主義の発展をリードしたピュリタン実業家のモットー、「天はみずから助くる者を助く」を文字どおり実践し、近代事業の特色である独立自営、先憂、自由を体得したニューマンであった。彼は、勤労と節約を愛し、信用を重んじ、進取の気性に富み、何事にも積極果敢に取り組んでアメリカン・ドリームを実現したヒーローであった。重要なことは、自らの成功に甘んずることなく、公的活動にも大いに献身した経世家であったことである。もっとも、彼自身はピュリタンではなかった。理論論者で「変化をつくりだす人」(チェンジ・メーカー)であった。

前述したとおり、アメリカ資本主義の揺籃の地はニュー・イングラン

ド地方であった。この地方は、資本主義の発達する以前から資本主義的精神が醸成されていて、アメリカ合衆国のほかの植民地にくらべて、同地方の住民は利益計算に長じていると非難されていた、といわれている。N・ホーソンの『緋文字』(一八五〇)に描かれているように、職務の励行とあらゆる娯楽の禁止が極度に守られている地域であった。

フランクリンはいう。「時間、貨幣だ、ということをおぼろげに忘れない」、「貨幣は繁殖し、子を生む」、「支払いのよい者は他人の財布にも力をもつ」、「信用に影響を及ぼすことは、どんな些細なおこないでも注意しなければならぬ」。

これらの格言はたんなる処世訓ではない。信用における立派な人になること、とりわけ自分の資本を増加させることを自己目的だと考えるのが各人の義務だと考える実践的な経済倫理は、過去のたんなる営利主義とはまったく異なる性質の「資本主義の精神」とよばれるものである。

道徳律廃棄論者の登場

以上のように、初期の資本主義は、勤労と節約を重んじ、禁欲的で積極的に世のなかに対処していこうとする倫理(「世俗内禁欲」)が横溢していた。ロビンソン・クルーソーやベンジヤミン・フランクリンのようなライフ・スタイルは、このことをよく示している。

ところが、このような「エートス」(ethos)が、経済発展とともに喪失していくことになる。それは「自由放任」(laissez-faire)によって、経済活動が活発化していった結果、膨大な社会的生産力が解放され、人間は何事も自由にやれるようになったという錯覚に陥ってしまったからである。その一例はドフトエフスキイの小説『罪と罰』の主人公ラス

コリーニコフにみる事ができる。超人思想にとりつかれた彼は自分なんでも許されている人間だと思いこんで金貸しの老女とその妹を殺害してしまう。この大学生は、二十世紀の「ネクロフィリア」(大量殺人者)であるヒトラーやスターリンの原型(プロトタイプ)であるとともに、「慢心しきったお坊ちゃん」(オルテガ・イ・ガゼット)になってしまった現代大衆社会の大衆の原型でもある。ドフトエフスキイのこの小説は、一九世紀の半ばの作品であるが、後にやってくる時代を予告している。彼もまた一八五一年にロンドンで開かれた万国博覧会(正式名称、大博覧会)のためにつくられた「水晶宮」(クリスタル・パレス)に怖気を感じたひとりであり、当時の世界資本主義のリーダーである大英帝国が、このグロテスクな建物をつくることによって、ロビンソン・クルーソーのもっていたようなみずみずしい倫理観や行動様式を喪失してしまったことを感得してしまっただけである。

先に述べたように、現代は「経済主義」の時代である。この時代精神は、「ファウスト的衝動」(der Faustische Drang)である。これはどこまでも「もっと、もっと」(mehr und mehr)を求める精神の発動で、「無限の衝動」(Progress ad infinitum)ともよばれる。ロビンソン・クルーソーやベンジャミン・フランクリンの経済倫理は、巨大な社会的生産力を解放するのに成功した。この生産力の追求は止むことなくつきき、さらに「もっと、もっと」と追求されていったのである。この成功を象徴しているのがロンドン万国博覧会のクリスタル・パレスであった。この成功が人間を傲慢にし、あたかもなにごとく許されるような錯覚を生んでしまったのである。このような錯覚のちに二十世紀において拡大再生産され、多数の「アンチノミアン」(道德律廃棄論者)が登場する世紀になっていくのである。¹⁸⁾

エコノミー、エコロジー、そしてエシックス

正慶 孝

エコノミーとエコロジー

今日、経済学は英語ではエコノミクスとよぶのがふつうである。アルフレッド・マーシャルの『経済学原理』(ザ・プリンシプルス・オブ・エコノミクス)の初版が一八九〇年に上梓され、これ以降、かつて英語ではポリテイカル・エコノミーとよばれていた経済学がエコノミクスとよばれるようになった。

ところで、エコノミーにしろエコノミクスにしろ、最初の二文字のエコということばが、ギリシア語で家を意味する「オイコス」(oikos)から出ていることや、生態学を意味するエコロジーのエコもエコノミーのエコ同様、この「オイコス」から出ていることはよく知られている。二つは実に同種の言葉なのである。

ドイツの生物学者エルンスト・ヘッケルが生態学を十九世紀半ばに提案したとき、生態学(Ecologie)の定義は「動物と植物の経済」というような意味であった。今日では、この生態学は生物学固有の研究領域の学問であるにとどまらず、「ヒューマン・エコロジー」のように、人間と環境をめぐる科学の領域にも応用されている。

それは経済発展の結果、人間環境や生活の質(クオリティ・オブ・ライフ)が劣悪化し、人間の生存環境である人間「生態系」が破壊されつつあるという認識からであった。「もっと、もっと」を追求していくと、やがて「この世の終わりの日」を迎えてしまうことは必至である。このような認識が出てきたのは、冒頭にふれたように、高度大衆消費社会が到来し、「豊かな社会」に突入したからである。一九七二年の「国連人間環境会議」や同じ年のローマ・クラブの第一回報告『成長の限界』も

同様な問題意識に基づくものであった。さらには、ケネス・ボールドウィングによって提唱された「宇宙船地球号の経済学」も同様であった。この主張は、いままでのように資源も無限にあり、廃棄物を処理する場所も至る所にあるとする前提に立った「カウボーイの経済」では「この世の終わりの日」を迎えてしまうという主張で、この悲劇的な結末を避け、「楽園回復」の方向に軌道修正するためには「クリーンでリサイクル」可能な経済システムをつくらなければならないという主張である。このような経済システムを彼は「宇宙人の経済」となづけた。

このような経済システムのコペルニクスの転回を促進しなければならぬ背景には、経済倫理の大きな変化がある。先にも触れたように、ケバケバしくて美的ではなく、力だけを強調したクリスタル・パレスに幻滅したドストエフスキイは、ラスコーリニコフを造形することによって、「神が死んでしまったー」(F・ニーチェ)時代状況を描いた。ラスコーリニコフは、一方では何事もやるのが許されると思っている「超人」(スーパーマン)である。他方ではいつでも何事かにびくびくしているしがない無力な大衆のひとりである。これはまさしく現代人の二重人格性を描いている。かれはジーキル博士であるとともにハイド氏でもある。R・L・ステイヴンソンの小説『ジーキル博士とハイド氏』(一八八六)にも、分裂的な近代人の二重人格性が描きだされている。

この二重人格性は、経済発展の結果、もたらされたものである。よく働く現代人は、「アニマル・ラボランス(働く動物)」であり、「ワーカホリック」(働き中毒)でもある。生産においては禁欲的に働き一定の成果をあげること努力する。その結果、膨大な生産力が確保されたのである。したがって、この膨大な生産力の成果を享受するためには、浪費と享楽とが必要である。一方における禁欲主義と、他方における快楽主

義(ヘドニズム)の分裂を巨大な生産力の解放がもたらしたのである。巨大に生産力に対応するものは巨大な消費力でなければならぬ。巨大な消費力とは膨大な浪費のことでもある。今日の経済システムは、膨大な浪費の制度化によって支持されているのである。この浪費を促進する制度として発明されたのが、クレジット(信用)である。クレジットとは借金のことである。これをクレジットと称することによって借金のもつくらいイメージを払拭してしまった。クレジットはいまではだれでも手軽に利用できるシステムになっている。一枚の「クレジット・カード」で、なんでも買える。あとの負債の支払いを考えにいれなければ、一枚のカードはその利用者に万能の力をあたえてしまう。彼あるいは彼女はスーパーマン(スーパーウーマン)になったかのごとく、錯覚を与えられる。こうして、消費はいちだんと促進される。

また、「計画的陳腐化」とか「アニニアル・チェンジ」というような、まだ十分つかえるものも捨てさせるマーケティングの手段も開発された。今日のあらゆるものには、製造年月日とともに死亡年月日がまわっている。早く捨ててもらわなければ新製品の販売ができず、巨大な生産システムが停止して、過剰生産恐慌を招くことになる。このことを避けるためには、「もっと、もっと」消費してもらわなければならないのである。かくして、「ホモ・コンスマエンス」あるいは「ネオフィリア」としての人間が誕生することになる。前者は「浪費的人間」のことであり、後者は「新しがり」屋のことである。

エコノミーの発達は、勤労と禁欲を重視するライフスタイルの持ち主によって促進された。その結果、巨大な生産力が生まれることによって、エコノミーのもともとの意味である「節約」とは逆の結果である「浪費」を招いているのが、今日の産業社会の文化的矛盾である。エコノミ

の発達はまた、なにごとく可能であるかのごとく錯覚を多くの人にあたえてしまい道徳律さえも超えてしまふ道徳律廃棄論者、なにごとく許されるというような傲慢な(ヒュブリス)を生んでしまったのも、「経済時代」の特徴である。

ここに現代のエコノミー、エコロジー、そしてそれらの根底にあるエシックスの諸問題が集約的に表現されている。しかも、現代人は「いまここで」(now and here)志向にとらわれ、絶えず「即時的満足」(instant satisfaction)を求める「此岸的人間」であるという特徴がある。ここに現代の諸問題の解決を困難にする原因がある。

「ファウスト的衝動」は、ゲーテが『ファウスト』を書いた十八世紀以上に二十世紀に発動した。次の世紀にはこの「ファウスト的衝動」で、ことを運ぶことはできない。それにかわる「限度」(limit)の経済システムの構築が早急に求められているのである。「生存の科学」であるバイオエシックス(V・R・ポッター)や少欲知足の仏教経済学(E・F・シュマッハ)なども、「もっと、もっと」を追求してきたロンブス以来の「超越」(beyond)のもたらすさまざまな地球的巨視的課題を解決するためのアクション・プログラムとして検討に値いするであろう。

(注)

- (1) B・グランベルジュ、J・C・リスミスゲル編著『拒絶の世界』(上)、岸田秀訳、ペリカン社、昭和四十六年、一一一―一二二ページ。
 (2) W・ゾンバルト『ドイツ社会主義』、難波田春夫訳、『難波田春夫著作集』(10)、早稲田大学出版部、昭和五十七年、一―三ページ。
 (3) Robert Heilbroner, *The Worldly Philosophers, His celebrated study of lives and ideas of the great economic thinkers*, Pelican, Books, 1980, p. 27.
 (4) マキアヴェッリ『君主論』、黒田正利訳、岩波文庫、昭和三十七年、一五〇―一五二ページ。

エコノミー、エコロジー、そしてエシックス 正慶 孝

- (5) 前掲書、一五二―一五三ページ。
 (6) 前掲書、一〇八―一〇九ページ。
 (7) ベルクソン『哲学の方法』、河野與一訳、岩波文庫、昭和三十六年、九九―一〇〇ページ。
 (8) デフォー『ロビンソン・クルソー』、吉田健一訳、新潮文庫、昭和四十七年、十―一三ページ。

- (9) 前掲書、五五―五六ページ。
 (10) 前掲書、六二―六三ページ。
 (11) 前掲書、六四―六五ページ。
 (12) 前掲書、七一―七二ページ。
 (13) 前掲書、一〇七―一〇八ページ。
 (14) 前掲書、一二九―一三〇ページ。
 (15) フランクリン『フランクリン自伝』、松本慎一・西川正身訳、岩波文庫、昭和四十五年、一三五―一三六ページ。
 (16) M・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、大塚久雄訳、岩波文庫、四三―四四ページ。
 (17) 前掲書、四〇―四一ページ。
 (18) ダニエル・ベル『二十世紀文化の散歩道』、正慶孝訳、ダイヤモンド社、一九九〇年、本書の第十四章モダニズムの超越、にアンチノミアン(antinomian)の諸問題が総括的に論じられている。
 (19) K・E・ポールディング『経済学を超えて』、公文俊平訳、竹内書店、一九七〇年、五三五―五八四ページ。
 (20) コンラッド・ローレンツ『文明化した人間の八つの大罪』、日高敏隆・大羽更明訳、思索社、昭和四十八年、三十三―三十四ページ。